第2編 上平 B遺跡(2次調査)

遺跡略号 OK-UD·B

所 在 地 双葉郡大熊町大字大川原字南平調 查 期 間 平成17年10月26日~11月14日調 查 員 阿部 知己·髙林 真人

第1章 調 査 経 過

上平B遺跡は『福島県遺跡地図』に登録・記載された周知の遺跡である。平成8年度には常磐自動車道建設予定地を対象とした表面調査により再確認され、その広がりは36,600㎡と提示された(第1編図1参照。福島県教育委員会1997)。平成15年9月には、常磐自動車道建設地内の1,000㎡を対象に試掘調査が実施され、町道を含む1,100㎡が保存を要する面積とされた(福島県教育委員会2004)。平成17年度には、工事計画変更から工区が広がり、1次調査の結果、縄文土器を包含している堆積土が続くことが確認されたため、1次調査区の西側50㎡が要保存面積として追加された。これまでの試掘調査及び工区拡張等において提示された、常磐自動車道建設地内における保存を要する上平B遺跡の面積は、1,150㎡である。

発掘調査については、遺跡北側の780㎡を対象に、平成16年に1次調査を実施した。これに続く2次調査は、前年度調査区の西側50㎡を対象として平成17年に実施した(図1参照)。以下、調査の概要を記す。

10月26日には、50㎡を対象に、重機による表土剥ぎに着手し平成17年度の発掘調査を開始する。 10月27日には、南に隣接する上平A遺跡から調査員1名と作業員5名が移動し、本格的に遺物を包含する堆積土の掘削、遺構の確認を実施し始める。平成16年度の1次調査時において、赤褐色土

(LⅡ), 黒褐色 (LⅢ) 中には, 多量の遺物が 包含されている状況を確認している。このため 2層の遺物包含層の掘削にあたっては, 1次調 査と同様, グリッドごと, 堆積層ごとに包含層 の掘り込みを実施した。また, 各堆積層を除去 した段階で, 遺構確認作業を実施している。

11月上旬頃には、基盤層である黄褐色土や礫層の上面で、3基の土坑や小穴が検出され始め、遺物包含層の掘り込みとともに、これら遺構の精査を併せて行った。11月14日には地形測量を実施し、平成17年度分の発掘調査を終了した。

平成17年度までに実施した上平B遺跡の最終的な発掘調査面積は、1次調査の780㎡を加えて,合計830㎡である。

福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興 事業団と東日本高速道路株式会社による現地の

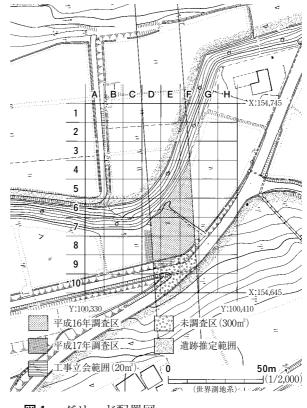


図1 グリッド配置図

引き渡しは、上平A遺跡・上平B遺跡・道平遺跡を合わせて、12月2日に実施し、50㎡の調査区については埋め戻しを実施した。平成17年度の発掘調査で検出した遺構は、土坑3基、遺物包含層約50㎡、小穴で、発掘調査に要した日数は延べ12日である。

また、町道北側裾の20m²については、発掘調査工程状危険を伴うため、工事時の立会が予定されている。その他の町道部分(300m²)については工事が及ばないとして、調査をせずに現状のまま残される。

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構の分布と基本土層

遺構の分布 (図2, 写真2)

上平B遺跡 2 次調査において検出された遺構は、土坑 3 基と小穴である。平成16年度の 1 次調査に検出された遺構を合わせた遺構数は、掘立柱建物跡 5 棟、土坑25基、集石遺構 1 基、小穴である。図 2 には、平成16・17年度の調査成果を合わせて示した。

平成16年度の1次調査で確認された、縄文時代後期前葉の掘立柱建物跡5棟については、周辺に多数の小穴が確認できることから、調査区の外にも建物跡のある可能性が高いことが指摘されている。また、建物跡周囲の貯蔵穴などのあり方や、出土遺物に特殊なものは認められないことから、ごく一般的な集落のあり方と判断されている。

建物跡から南に40m離れた上平A遺跡の3次調査区北端からは、同時期の竪穴住居跡2軒が確認された。この場所は、上平B遺跡のある現地表から4mほど高い場所にあり、建物跡の位置を見下ろす形となり、そこから45mほど南の段丘肩部には該期の貯蔵穴群が立地する状況が分かった(第1編図5参照)。このことから、大川原川南岸の段丘上には、上平B遺跡と同じ縄文時代後期前葉の遺構が、最も高所の段丘肩部に貯蔵穴、その下斜面裾に竪穴住居跡、さらに下段に建物跡と貯蔵穴という具合に、意図的に構造物の設置場所を分けていた可能性が高いと考えられる。

基本土層(図3,写真3)

基本土層については、平成16年度の1次調査時に確認した内容と一致している。

上平B遺跡の $1 \cdot 2$ 次調査を実施した,町道の北側については,圃場整備による地形の改変を受けてはいるものの,そのほとんどは盛土によるものであることが確認された。調査に際しては,調査区内に堆積する土を $L \ I \sim L \ IV$ に $4 \ IV$ 区分した。 $L \ I$ は圃場整備時の盛土を含む表土, $L \ II$ は鈍い赤褐色土で,その土質から調査当初は圃場整備に関わる盛土と考えた。しかし, $L \ II$ は均一な土で構成され,ブロック土が混じり込むような状態は観察されていない。包含されている遺物そのものにも摩滅も見られない。基本的に $L \ II$ については,盛土ではなく,自然堆積層が後世の水田耕作により 2 次的な変化を受け,赤褐色に変化したものと考えている。

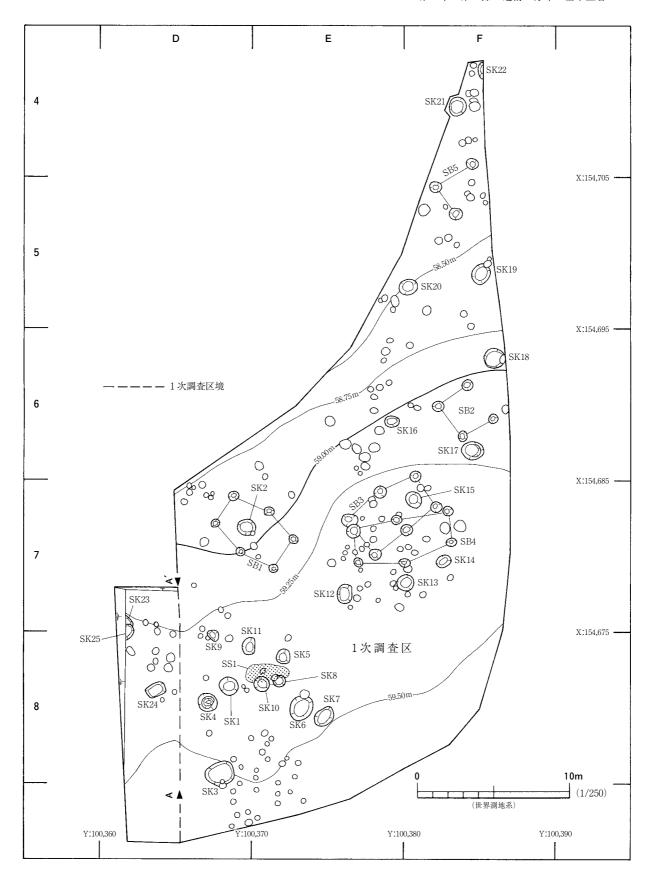


図2 遺構配置図

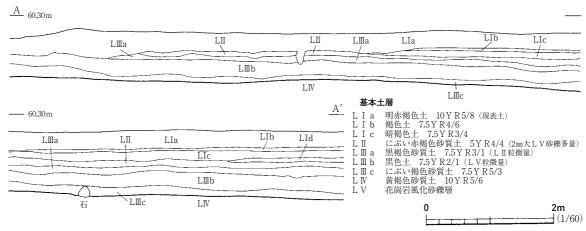


図3 基本土層

図3に示した基本土層A-A'は調査区西壁の状態である。LIは表土で,圃場整備に伴う盛土を含む。比較的多くの遺物を包含している。LIはにぶい赤褐色土で層厚は $10\sim20$ cmほど,調査区内をほぼ一様に覆っている。調査区南端については,圃場整備の時若干削平されているらしく,欠落している。遺物の出土量は多く,LI出土分を除くと,包含層出土量の約30%を占めている。

LⅢ層は $a \sim c$ に 3 分類している。LⅢ $a \cdot b$ は黒褐色土,LⅢ c はにぶい褐色土で,LⅣ に続く漸移層である。LⅢ a の層厚は $10 \sim 30$ cm ほど,LⅢ b 層の層厚は $20 \sim 40$ cm ほどで,斜面下位の北側に向かって若干厚さを増して堆積している。LⅢ c 層はにぶい褐色土で,層厚は約10 cm,遺跡内をほぼ均一に覆っている。基本的にLⅢ c は無遺物と考えている。

各堆積層と遺構との関係を概観すると、縄文時代後期の土坑の多くは、LⅢc上面であらかたその存在を知ることができる。 (阿 部)

第2節 土 坑

上平B遺跡2次調査では、3基の土坑を確認した。1次調査時の土坑数を加えると、合計25基を数える。土坑の番号は、1次調査を踏襲して、23番から付けた。

23号土坑 S K 23 (図 4, 写真 3)

本遺構はD7・8グリッドにまたがって位置し、西半分は調査区外に続いているため全容は明らかではない。S K25と重複しており、本遺構の方が新しい。検出面は南・東側において L \square c 上面である。一方、土層断面(図4左上A-A')を見ると、北側では L \square c 上面よりも30cmほど高い位置の L \square a 層下部から掘り込まれている。

平面形は不整楕円形である。規模は、上端で長軸200cm、中端で長軸97cm、長軸方位はN40°E、 検出面からの深さは37cmを測る。周壁は、底面から約20cmまではほぼ垂直で立ち上がった後、それ より上位では緩やかに立ち上がっている。このため断面形はロート状を呈している。底面は平坦で ある。

堆積土は6層に分けられる。堆積土にはレンズ状の堆積状況が観察できることから,自然堆積土 と考えている。

本遺構からは縄文土器片が3点出土し、図4下に示した。同図 $1\sim3$ はすべて深鉢形土器の胴部片で、1は斜行縄文を施し、2は1条の沈線上に円形の小突起を貼り付けている。3は1条の隆帯を巡らし、その下に斜行縄文を施している。

本遺構は不整楕円形の土坑で、その性格を明らかにすることはできなった。土坑の時期は、出土 遺物から縄文時代後期前葉と考えている。 (阿 部)

24号土坑 S K 24 (図 4, 写真 3)

本遺構は、D8グリッドに位置し、北西3.5mにSK23・25がある。検出面はLN上面である。 平面形は上端では不整楕円形、中端において隅丸長方形を呈している。規模は上端で長軸約196 cm,短軸約150cm、中端で長軸約126cm、短軸約84cm、長軸方位は中端でN55°E、検出面からの深 さは72cmを測る。底面はほぼ平坦である。周壁は、西・北壁ではほぼ垂直に立ち上がり、東・南壁 は急な角度で底面から50cm前後立ち上がった後、それより上位では緩やかに立ち上がっているため、 断面形状はロート状を呈している。

遺構内堆積土は8層に分けられる。壁際からの流れ込みが認められることから自然堆積土と判断している。 ℓ 2 · 3 は、土中にLIV粒を多量に含んでいることから周壁の崩落土と考えている。

本遺構からは縄文土器片が34点出土し、そのうち2点を図4下に示した。図4-4は盲孔を加えた円形の突起が付されている。同図4は縄文地に、縦位に並ぶ列点状の刺突文を施している。

本土坑については出土遺物から縄文時代後期前葉と考えている。本土坑は、規模と形態から落し 穴状土坑と考えている。 (髙 林)

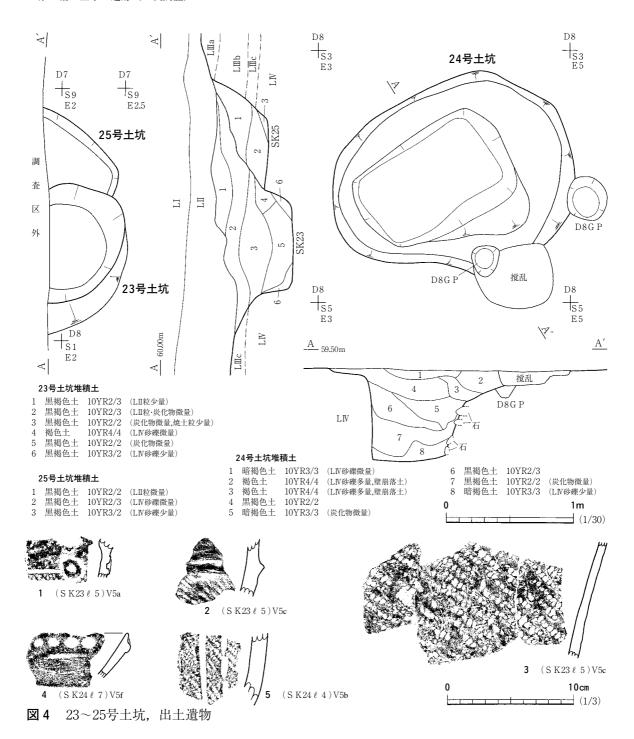
25号土坑 S K 25 (図 4, 写真 3)

本土坑はD 7 グリッドに位置し、西半分は調査区外に続いているため全容は明らかにできなかった。S K23と重複しており、本土坑はS K23により壊されている。検出面は東側においてL \square c 面である。土層断面(図 4 左上A - A')をみると、北側ではL \square c 上面よりも30cmほど高い位置のL \square a 層下部から掘り込まれていることが分かる。

平面形は隅丸方形を呈していたと考えている。規模は, $L \coprod c$ 面で確認できた東西長で長軸86cm, 検出面からの深さは11cmを測る。周壁は,土層断面(図 4 左上A - A ')をみると,底面から急な 角度で立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

遺構内堆積土は3層に分けられる。壁際からの流れ込みが認められることから自然堆積土と考えている。

本遺構から遺物は出土しなかった。



本遺構は平面隅丸方形の土坑であった可能性が高いことが確認されただけで、機能については不明である。時期については、SK23との重複関係から、縄文時代後期前葉と考えている。 (高 林)

第3節 遺物包含層

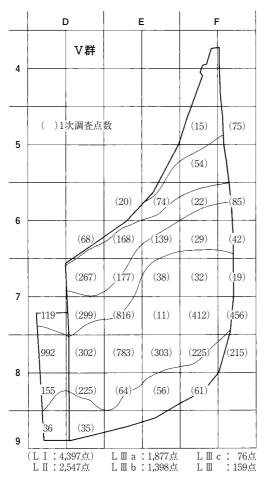
上平B遺跡の2次調査では、平成16年度の1次調査時同様、調査区のほぼ全域に遺物包含層が形成され、調査の段階で $LI \sim \mathbb{N}$ の4層に区分し、調査を進めた。これらの土層の詳細については、第2章第1節で報告した。

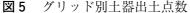
また、遺構外出土遺物については、10mグリッドを 4 分割した一辺 5 mの方眼ごとに取り上げた。この 4 分割した方眼は、北西から時計回りに「 $1\sim4$ 」と番号を付し、例えば、D 8 グリッドの 4 番目のマスから出土した場合、「D 8 -4」と表示し、併せて遺物の出土層位も付した。

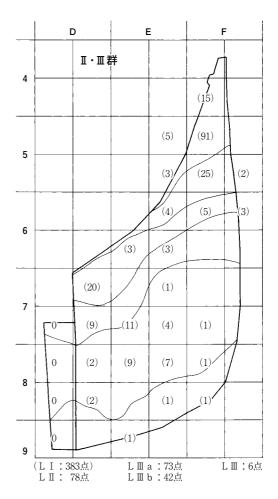
以下では、包含層から出土した遺物について報告するが、表土や撹乱穴等の中から出土した遺物 についても本節で扱う。

遺物の出土状態 (図5)

上平B遺跡の2次調査で出土した土器は、V群土器が主体をなし、今回出土した点数は1,381点で、1次調査も合わせると合計10,746点が830㎡の調査区中から出土したことになる。今回の調査







では1次調査で確認できていたⅡ・Ⅲ群土器は1点も出土していない。

2次調査で確認したV群土器の堆積層ごとの出土量は,L IIが79点,L IIIが1,043点,L III a が266点,L III b が33点を含んでいた。図 5 にはL II を除いた平面的な土器の出土量を示した。最も出土量が多いのがD S - 1 グリッドの992点で,他に比べて圧倒的に出土量が多かった。V群土器は,II 群土器に比べ調査区西縁付近に分布の中心を持つようである。これに対して,I 次調査時に確認した縄文時代前期前葉の土器に比定される II・III 群土器の分布は,I 次調査区の北東端付近に分布の中心があると考えられている。

2次調査で出土した土器の大半は、手の平大以下の破片で、特にまとまった状態で出土した個体は無かった。なお、包含層の掘り込みに際しては主として唐鍬を使用したため、石鏃等小型の遺物については、サンプリングエラーが生じた可能性がある。

遺 物 (図6~8, 写真4)

Ⅳ 群 土 器 IV群土器は1点だけ図示した。図6-1は2類で、施文された文様から大木10式と考えられる。

V 群 土 器 図 $6-2\sim13$ は突起の付く口縁部で 1 類とした。図 $6-2\cdot4\sim7\cdot9$ は隆帯による $\lceil C \rfloor$ 字状または棒状の突起である。図 $6-3\cdot10\cdot11$ は波状口縁の波頂部に付く楕円形状の小突起である。図 6-13は突起状の盲孔に沈線が施されていた鉢の口縁部片である。図 6-8 は無文地で平板な造りの突起である。 1 次調査同様,平口縁の深鉢形土器が主体を占めると考えられる。図 6-12はひねりを加えた突起を持つもので,加曽利E式系土器の可能性もある。

2類は図6-14~20が比定され、縄文地に沈線で蕨手状または波状文様を描いている。

3類は $a \cdot b$ 種の2つに区分した。a種は図 $6-21 \cdot 22$ で,胴部に縦位の帯状無文帯が配されている。b種は図 $7-1\sim9 \cdot 11 \cdot 12$ で,幅の狭い帯状の無文帯・縄文帯で文様を描いている。文様の基点には盲孔を配し,図 $7-1 \cdot 5 \cdot 6$ のような $\lceil C \rceil$ 字状や楕円形状の文様が多く描かれていている。図7-4は無文地に沈線で文様を描いている。

5類は $a \sim f$ 種に区分したが、 $1 \cdot 2$ 種との区分にいては不分明なものが多く見られる。

図 $7-10\cdot 13\sim 18$ は a 種に比定され,「C」字状または棒状の隆帯の突起に類似するが,退化に伴う沈線化が見られる。 b 種は口縁部下端に沿って横位の沈線または隆帯を巡らしたものである。図 $7-19\cdot 21$ は沈線を,図 $7-20\cdot 22\cdot 23$ は隆帯を巡らしている。 c 種は器面に条線文を施したもので,図 $7-26\cdot 27$ が比定される。 d 種は口縁部下端に沿って押圧を加えた隆帯が巡るもので,図 $7-24\cdot 25$ が比定できる。

図8-1~5は6類とした。図8-2は注口土器片で、注口部の上に突起が付されていることから、正面観が[8]の字の突起状に見えるよう整形してある。図8-1・4・5は両耳壷の把手部分と考えている。図8-3は壷形土器の口縁部片と考えられ、[8]の字状の把手が付けられている。

V群土器は、口縁部文様帯の「ノ」の字状や「C」字状の隆帯に沈線や盲孔が加えられることや、口

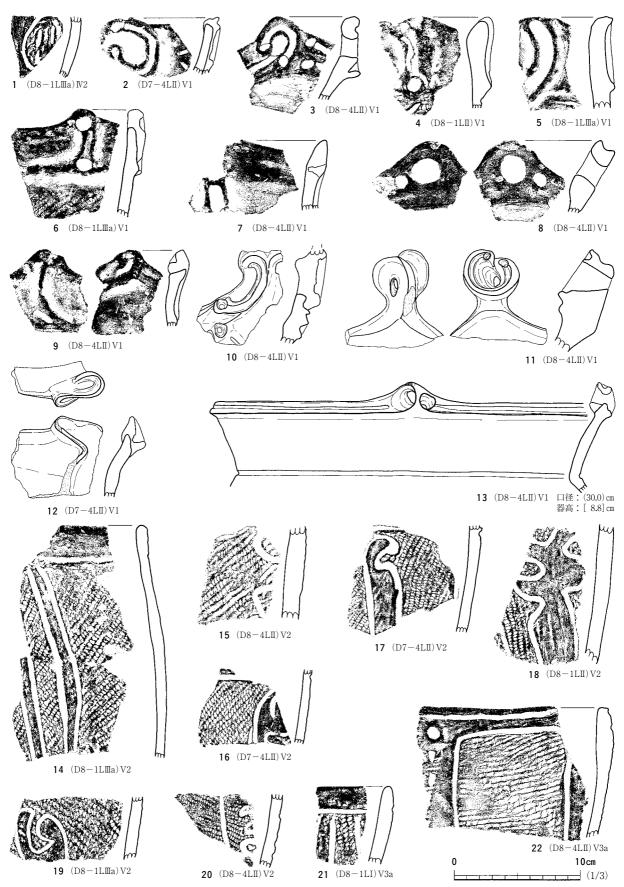
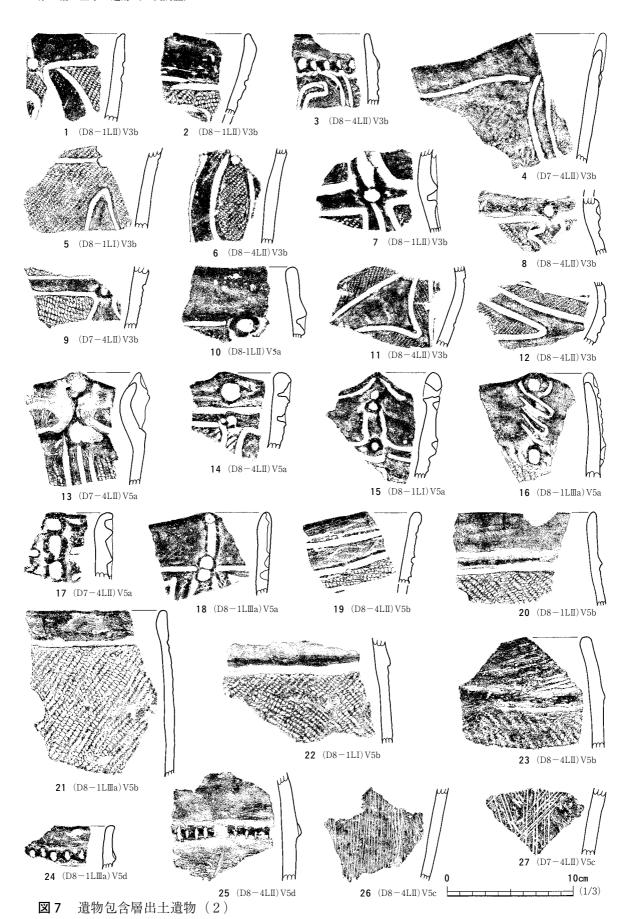
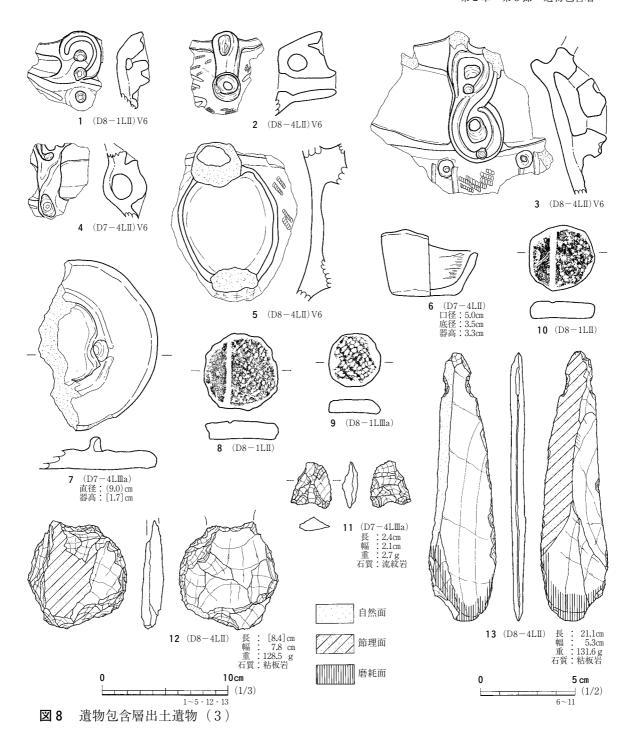


図6 遺物包含層出土遺物(1)



102



縁部下端の隆帯に代わり沈線を施したり、隆帯に沿って沈線が施されることなどから、その多くは 綱取Ⅰ・Ⅱ式土器と考えている。

土 製 品 図8に示した5点が包含層中から出土したすべてである。同図7は蓋の破片で、上面に円形の隆線に盲孔が認められるもの、目立った文様は施されていない。同図6は鉢状のミニチュア土器である。同図8~10の3点は土器片を用いた円盤である。

石 器 図8に示した3点が包含層中から出土したすべてである。同図11は石鏃の未成品で、素材の厚みが取りきれていない。同図12・13はいずれも粘板岩製の打製石斧で、13はクツベラ状を

第2編 上平B遺跡(2次調査)

呈し、12は分銅形であったと思われる。同図13の刃先部分をみると、図中に破線で示した範囲に、使用による磨耗が認められる。 (阿 部)

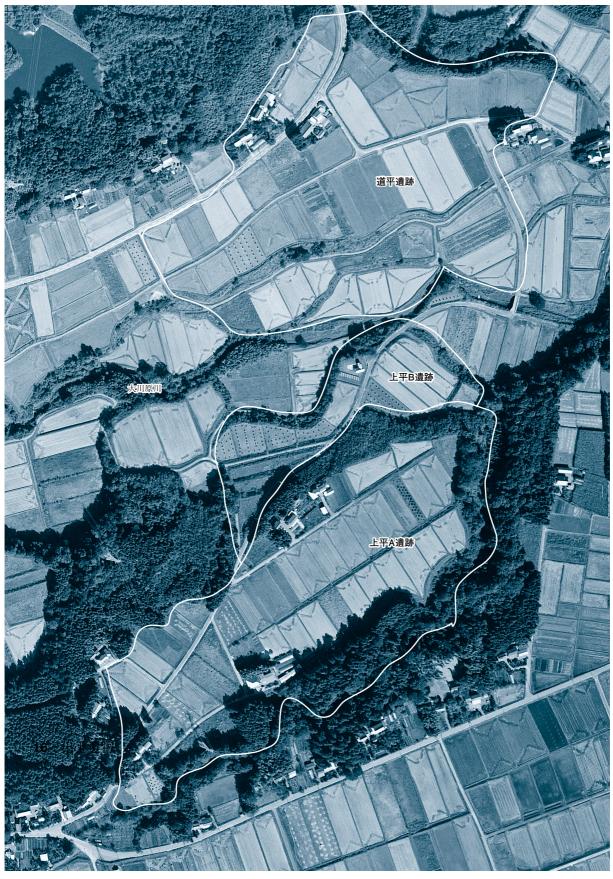
参考文献

福島県教育委員会 1997 『福島県内遺跡分布調査報告3』

2005 『福島県内遺跡分布調査報告11』

松本 茂ほか 2005 『常磐自動車道遺跡調査報告41』 福島県教育委員会

「まとめ」については「第4編第3章」中で後述した。



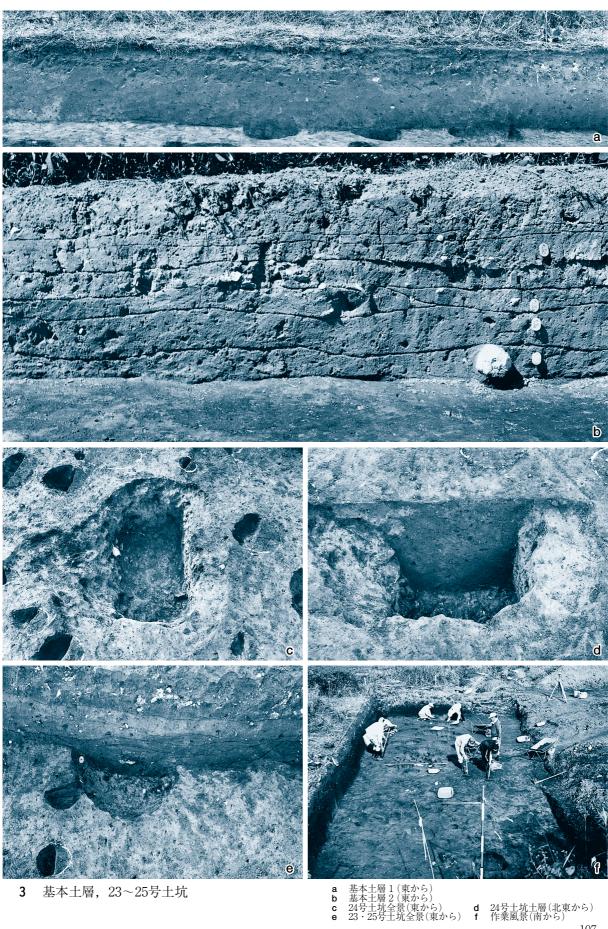
1 遺跡遠景 (南上空から。平成11年10月撮影)





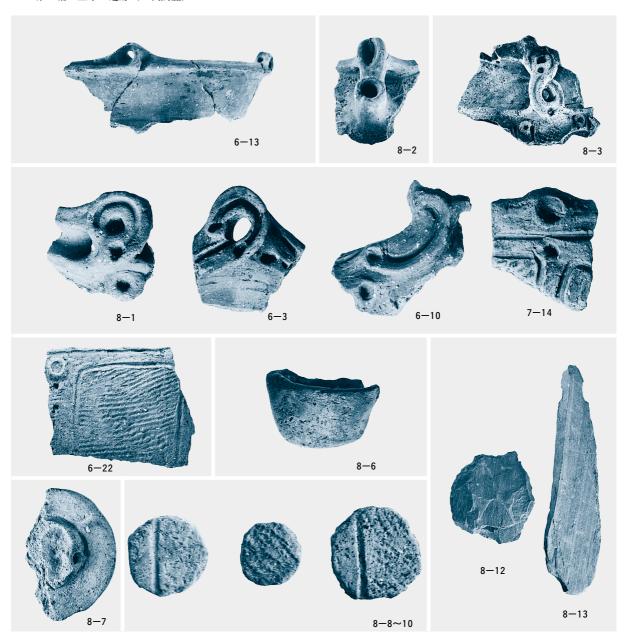
2 調査区全景

a 調査前調査区近景(南西から) b 調査区近景(南から)



3 基本土層, 23~25号土坑

第2編 上平B遺跡(2次調査)



4 出土遺物